

2022年度水環境文化賞を受賞して

NPO 法人海の再生ネットワークよろん 理事長 田畑 克夫
事務局長 池田 香菜

1. 活動の背景

私たちが活動の拠点としている鹿児島県最南端の島与論島は、サンゴ礁が隆起して形成された島で、島の周囲をサンゴ礁に囲まれた周囲約 22 km の小さな離島です。人口は約 5,100 人で、島の主幹産業は漁業や農業、観光業で成り立っています。

1980 年代から世界的にもサンゴの大規模白化が確認されてきましたが、1998 年には日本でも多くの地点で大規模白化が確認され、与論島においても多くのサンゴが死滅してしまいました。そこで、与論島で「ウル（サンゴ）プロジェクト」が発足され、ボランティアダイバーを誘致してサンゴ調査を行うリーフチェックが 2000 年より開始されました。サンゴ礁保全活動は、サンゴだけを保全しても成り立ちません。サンゴを取り巻く水質環境の回復、そのための陸域活動の改善など、活動は多岐にわたります。当法人は 2015 年 10 月に法人認証を受け、与論島内外の多くの人をつなぐネットワークを構築し、サンゴ礁の再生を目指して活動してきました。

2. 活動内容と今後の展望

地域の暮らしとサンゴ礁生態系のつながりを意識しながら与論島内外の関係機関・関係者と連携し、①陸域・周辺海域での環境保全活動、②環境教育の推進を図る活動、③地域の暮らしを考える活動を行っています。与論島周辺のサンゴ被度（調査海域においてサンゴが岩盤を覆っている割合）や、サンゴを食べるサンゴ食害生物の個体数調査を通して海域のモニタリング調査を行っています。

とくに 2016 年から 2020 年の 5 ヶ年間は、環境省の「サンゴ礁生態系保全行動計画 2016-2020」のモデル地域に



写真1 リーフチェック 2018



写真2 水中調査の様子

選定され、陸域に由来する赤土等の土砂・栄養塩等の対策の推進を図るため、環境省・与論町・地元住民・学識経験者と連携し、サンゴ礁生態系保全に向けた調査研究を行ってきました。サンゴ礁保全を進めていく上で、陸域由来の影響軽減は欠かせません。1980 年代から現在までの 40 年の間で、サンゴ礁のリーフの内側のサンゴはほぼ壊滅的な状況となってしまいました。サンゴ礁衰退の最も大きな要因は気候変動にともなう海水温上昇といわれていますが、現在の衰退要因の 1 つである我々人間が及ぼす影響も非常に大きいといわれています。よって、私たちの生活環境・様式を見直すことは、今後のサンゴ礁保全を行う上でも最重要課題であるといえます。

これからの未来を担う子どもたちへ、これまでの調査活動で分かったことを中心に、体験をともなう環境教育を実施しています。学校教育内ではなかなか実践しにくい、海へ出たの磯観察や、グラスボートを用いたサンゴ観察会、水試料内の栄養塩分析など、さまざまな出前授業を実践してきました。

昨今では「2050 年には世界中のサンゴ礁が絶滅する」という予測も発信されていますが、今できることを一歩ずつコツコツと実施していければと思うばかりです。また、豊かなサンゴ礁生態系を後世に残していくべく、今後は官民一体となった活動を実践していきます。



写真3 皆田海岸 1980 年代



写真4 皆田海岸 2017 年

最後に、この度はこのような賞をいただき、誠にありがとうございました。今後も小さな与論島からできることを実施・発信しつつ、島のサンゴ礁保全活動を進めていきます。